

# 名畑應順先生を偲ぶ



## 略 歴

明治二十八年十一月二十八日

岐阜県郡上郡に生れる。

大正 八年 六月

真宗大谷大学専修科卒業。

大正 九年 九月

京都帝国大学文学部哲学科に委託学生として入学、中国哲学史

専攻。同十三年三月終了。

大正 十二年 七月

対中文化事務局視察学生として中国で史跡踏査。

大正 十三年 三月

真宗大谷大学研究科修了。

大正 十三年 四月

大谷大学予科教授。

昭和 十一年 四月

大谷大学学部教授。

昭和 十一年 八月

中国哲学並に中国仏教研究のため、欧洲・中国へ留学。

昭和 十八年 十二月

大谷大学図書館長。

昭和 十九年 十月

大谷大学学監。

昭和 二十二年 七月

大谷大学学務部長。

昭和 二十六年 四月

大谷大学教授。

昭和 二十九年 十月

文学博士の学位授与。

昭和 三十年 十二月

真宗大谷派講師の学階を授与。

昭和 三十八年 三月

大谷大学名誉教授。

昭和 四十五年 二月

真宗大谷派宗務総長。

昭和 五十二年 七月 九日

心不全のため逝去、如是院。

## 名畑應順先生を偲ぶ

細川 行信

恩師名畑應順先生がなくなられてより、すでに十カ月あまりを経過してしまつた。先生はご自分のことについて殆んど語られず、外柔内剛にして几帳面なご性格であられ、いつも先生の方から思ひをかけられていたため、今になって寂寥ひとしお身にしむものがある。それに付けても、ご終焉がまことに卒然たる御逝去であり、ひごろ「病み上手」をもつて任じられていた先生であられただけに、今も「先生ノ」とお呼びすれば、「ちよつと待って下さいよ」と、その温顔を拝しえられるようである。

一昨年の秋、それは先生にとつて師であり友であられる、金子大榮先生と山口益先生をなくされて間もなく、ふかい寂しさの程を直接うけたまわつたことがある。おそらく、このことも加わつてか、その後、お身体も何となくご不自由のように見うけられた。しかし、その前年に出版された岩波文庫の『親鸞和讃集』について、つぎの原稿を執筆されていた毎日であり、実は、なくなられた七月九日の直前、その七日と八日の両日の月例法話会には、遠近より聴聞に参集された方々に、親鸞聖人の御消息中「かさまの念仏者のうたがひとわれたる事」の一通について、ねんごろにお話をなされ、この最後のご法話は、先生ご遺族の方々によつて満中陰に際して出版された。まことに、先生のご一生は、筆硯に

親しまれつつ念仏に生きられた、まさに自信教人信の八十有余年のご生涯であられたことを、ここに新めて偲ぶものである。

まず、つねに念仏を称えられていた日常のご生活についてであるが、これは、先生のご郷里が美濃の郡上であることと深く関わるといふことがわかる。こんにちも、鵜飼で有名な長良川をさかのぼつて郡上郡へ入ると、公害のない美しい水の流れと共に、人情の清純さを感じずにはおられない。とくにこの郡上の地は、ふるくより三河と北陸とを結ぶ位置にあり、ちかく明治時代にあつては、その中心でもある郡上八幡の安養寺に、楠潜龍（冷香院）・同秀丸（法香院）の両講師が知られて、教化を布かれたことにより、まさしく念仏の土徳にめぐまれた地方であると申されよう。したがつて、郡上の地にお育ちになり、お寺を大切にすぐ門徒に見護られて、先生の日常生活は、ご自坊を離れて京都や多治見にお住まいになつても、つねに仏恩を念じて止まない念仏の日暮しであられたことを、ありがたく思慕するものである。それは、どんな時にも決して欠かされなかつた朝夕の勤行、とくに両度の御命日と両親のご命日に鄭重であられたことを、私も何度か助音させていただいて、そのたびごと報恩の敬虔さ・尊厳性に心うたれたことである。

つぎに、先生の学問的ご業績については、その研究が大変ひろく深いことに、碩学としての先生を偲ぶものである。これについて、昭和十一年八月より二年間、支那学研究のためヨーロッパおよび中国へ留学され、帰国して発表された研究のことを述べなくてはならないが、末輩の私には出来ないもので、今は特に先生の著

書を通して、ご教導を蒙った学恩の一端を申し述べてみたい。

実は、先生の授業に出席したのが昭和二十二年で、そのおり『出三蔵記集』の講読を私たち三人で受講したことがある。そして、先生の厳密な解説に驚嘆し、訓読のむづかしさに閉口しながらも、ちかかに指導をうけたことを忘れることができない。このことから、さらに先生の論考を始めて読んだのが『大谷学报』所載の「祖聖と老病死」であった。そのころ私も四大不調の時であっただけに、寛喜三年の病中における内省は強く心にひびくものがあり、先生ご自身の体験よりする祖聖親鸞の病氣への対処が知られ、そのおわりに「かくて老といひ、病といひ、死といふもの、何れも人生にあつて最も忌むべき大苦惱であるが、聖人に於ては皆夫々に意味があり、慰めがあり、救があつたことを思はしめられる」と、その時はじめて病氣もご縁だといいただいたことである。つづいて、先生のご本をもとめて図書館へ行き、最初に熟読したのが『水火を蹈む』であった。本書は「度世の道」をはじめとして十六篇より成り、さきの「祖聖と老病死」もまた、その中に収められている。そして、そのいずれもが貪瞋二河の中にひたすら求道・聞法する一篇一篇であり、まさしく「水火を蹈む」と題された書名も有難く感じたことである。そのうち、昭和三十六年の宗祖聖人七百回御遠忌を前後して、各地でご縁を結ばれた法話を収録し、それが活字になったものに『悲喜交流』・『報恩の生活』・『この身のすくい』などがあり、これ等はいずれも学問的裏付けにもとづくものであり、とくに『教行信証』と『和讃』によるものが多い。かつて飛騨高山の学場や湖西の高島秋講

にお供した時、お聖教の拝読には一字・一句も極めて謹直・厳正にして、おのずから襟をたださすにはおられなかった。こうしたことは、昭和十一年の『親鸞聖人と讃』をはじめ、ついで『迦才浄土論序説』・『教行信証化身土巻講案』・『略論安楽浄土義講案』などの安居講本、それに『国宝願浄土真実教行証文類影印本解説』の「教行信証の教義」・『日本古典文学大系』の「親鸞集」・『国訳一切経』の「往生西方浄土瑞応伝」・『親鸞和讃集』などに、校訂・典拠・字解を踏まえた研究姿勢の厳しさがよくうかがえる。

このうち、昭和二十七年 degree 安居次講の講本である『迦才浄土論序説』は、ついで学位論文として提出され、それは『迦才浄土論の研究』として出版された。実は、この研究を先生が始められる以前、本文の文字・訓点の誤りも多く、迦才その人についての研究も殆んどなされていなかった状態であった。ここに先生は、その緒言に「私は諸山の宝庫や諸大学の図書館に就て、本論の古写本を漁つたり、古書に引用された本論の文を探したりして、極力本文を校訂し、私なりに理解されるやうに訓点を改めた」と誌されるごとく、大変な苦勞の末に本文篇を作製された。そして、本論の著者迦才が如何なる人であったのか、これまで全く不明であることに注目し、まず「迦才とその教系」において、迦才が撰論学派に属することをおさえ、以下その主唱するところは凡夫の救済であり、庶民の宗教である点に留意して、「浄土論書誌」・「浄土論と安楽集」・「二部の概観」・「援引の経論」・「西方浄土論」・「往生の機類」・「本為凡夫の標頭」・「往生の業因」・「別時意の会通」・「往生人の相貌」・「支那に於ける伝承」・「朝鮮に於

ける伝承」・「日本諸師の伝述」・「親鸞聖人と浄土論」の各章にわたって、随処に發揮の説を展開された。

ついで、昭和三十四年度安居本講の『教行信証化身土巻講案』は、その題名のとおり『教行信証』第六巻の講録ではあるが、それが真実の前五巻に対する方便の巻であることに留意されてのものであった。これについて、先生は發講の辞に「聖人は御本書の前五巻に於て、かくの如き浄土真実の教法をその根源から頭はし畢られた。然るに真実の教法を人間の現実に即して頭はすためには、さらにこれに対して簡ばねねばならぬものがある。それは外教の偽なるもの、聖道並びに浄土の教の仮なるものである。依って聖人はここに改めて化身土巻を開いて、離るべき権仮を明らかに批判され、捨つべき邪偽を厳しく教誡されると共に、それらの有する本来の意義を追求して、進んで真実の一道に帰入せしめようとせられる」と述べられ、これまた従来その講録も少ない化身土巻について、真実と方便・化身と化土・第十九願に就て・隠願の釈義・正雜二行と專雜二修・第二十願と『小経』・三願転入・時機と教法・邪偽への教誡・後序の要旨など、おおくの攻究論題をあげて講述された。

さらに、二度目の本講は昭和四十一年の夏で、その時の講録が『略論安楽浄土義講案』である。まず發講の辞において「曇鸞大師の著作のなかで、往生論註と讚阿弥陀仏偈とは、夙に重要な聖典として、尊重し依用されておるが、讚阿弥陀仏偈と合せて一部をなす、略論安楽浄土義は、古来、その撰者が誤って伝えられ、真偽が問題にされて、流伝してきた典籍である。わが真宗におい

ても、略論に至っては、宗祖が教行信証を始めとして、その著述に引用されていないということもあって、後学が疑義を懐き、これを講述することが、極めて少なかった」といわれる。こうした『略論』の書誌について、明治に入り熾煌出土の古写本が発見され、研究の結果、こんにちでは曇鸞の真撰とされるにいたった。これについて、撰者をめぐる問題、そして曇鸞の伝記に関し、さらには諸本とその流伝について、詳細にわたって解説を施されたこのうち、撰者については、かつて天台の靈空光謙が『即心念仏安心決定談義本』を著わして非曇鸞撰を唱えてより、浄土門内の学者がこれに反駁した推移について、その論点を要約して述べられ、さらに諸本と末疏について解説されたが、これらは極めて緻密な資料批判にもとづくものであり、先生にして始めてなし得られるものと思われる。

以上は、安居の講本についてであるが、とくに先生が真宗の念仏者として、終生つねに拜読・体解してこられた御聖教は、祖聖のご和讃であったとうかがわれる。それは岩波文庫の『親鸞聖人和讃』にはじまり、昭和五十一年の同じく『親鸞和讃集』にいたるまで、きびしい学問的研究と共に、悲喜の人生に味わってこられた記録として、私たち後につづくものに残された不朽の遺産であり、そこに説かれる念仏のこころを、今ここに頂戴いたしたいと念ずる次第である。

(昭和五十三年五月二十日しるす)

## 〔主要著書〕

- 親鸞聖人と讃集(校註)〔岩波文庫〕 昭和一一・九 東京・岩波書店
- 水火を踏む 昭和一八・六 京都 法蔵館
- 加才浄土論序説 昭和三七・七 京都 大谷派安居事務所
- 加才浄土論の研究 昭和三〇・三 京都 法蔵館
- 教行信証の教義―真蹟本による解説―〔国宝顕浄土真実教行証文類影印本解説〕(昭和三一・二 東本願寺)
- 悲喜交流 昭和三一・四 京都 永田文昌堂
- 教行信証化身土巻講案 昭和三四・七 京都 大谷派安居事務所
- 親鸞聖人論集 昭和三七・一一 京都 法蔵館
- 親鸞集(多屋校注)〔日本古典文学大系八二〕 昭和三九・四 東京 岩波書店
- 略論安楽浄土義講案 昭和四一・七 京都 東本願寺出版部
- 往生西方浄土瑞応伝(解説・訳註)〔国訳一切経・和漢撰述九七〕 昭和四五・一一 東京 大東出版社
- この身のすくい〔現代真宗名講話集三一〕 昭和四七・六 東京 教育新潮社
- 親鸞と讃集(校註)〔岩波文庫〕 昭和五一・四 東京 岩波書店
- 〔上記の著書に収めない主な論文・単行書〕
- 明遍僧都の研究(仏教研究一卷三号 大正九・一〇)
- 儒道二教と仏教との関係(研究科卒業論文 大正一三・三)
- 六朝時代に於ける釈老の交渉(京都帝大文学部委托生修了論文 大正一三・三)
- 老子化胡説の由来(仏教研究五卷三、四号 大正一三・一二)
- 楊仁山居士の真宗観(仏座 六号 大正一五・六)
- 曇鸞に現はれたる仙方と老荘思想(仏座 二九号 昭和三・五)
- 支那中世に於ける捨身に就いて(大谷学報一二卷二号 昭和六・四)
- ルイ・ド・ラ・ヴァレ・ブッサンの生涯とその業績(大谷学報二一卷四号 昭和一五・一二)
- 教行信証後序の要旨(第五一回講習会講本 昭和三六・七)
- 報恩の生活(大谷出版社 昭和三六・八)
- 親鸞聖人の人倫観と宗教(第五四回講習会講本 昭和三九・七)
- 釈迦教と弥陀経(信道二一卷五号 昭和四〇・五)
- 明師を憶う(同朋学報一四・一五合併号) 昭和四二・五)
- 仏道の指標(第五七回講習会講本 昭和四二・七)
- 凡愚のよろこび(四天王寺三三三三号 昭和四三・三)
- 立教開宗について(第六一回講習会講本 昭和四六・七)
- 浄土真宗のころ(岐阜県養泉寺 昭和五二・八)